



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2529号 2015.7.9 発行

日本3大七夕祭りに知的障害者らが参加 今年もお手製の竹飾り



福祉新聞 2015年07月07日 福祉新聞編集部
製作する利用者と職員

社会福祉法人進和学園（出縄雅之理事長、神奈川県平塚市）は知的障害のある利用者や保育園児、家族、職員が力を合わせ、毎年七夕祭りの竹飾りを製作し、日本3大七夕祭りの一つ「湘南ひらつか七夕まつり」に出展している。

きっかけは、2002年に、法人の事業所があるビルのオーナーから「市制70周年の記念に竹飾りコンクールに出してみないか」と誘われたこと。以来13年連続で出展し、賞に輝いたこともある。ビニール製の竹飾りが多い中、仙台和紙にこだわった手作り感満載の竹飾りを3本出展するのが特徴で、竹飾りの下では学園の自主製品も販売する。

きっかけは、2002年に、法人の事業所があるビルのオーナーから「市制70周年の記念に竹飾り

製作は4月から始まる。法人が運営する8カ所の障害者施設の職員で企画委員会を組織し、利用者中心にテーマとデザインを募集。各施設で分担し、くす玉、行灯、吹き流しを作る。

入選した昨年の竹飾り



今年のテーマは「にっこり げらげら わっはっはっは！ 世界にとどけ！ みんなの笑顔」。陶芸班が作る「笑べえ」という「童」と「笑う」をかけた人形のようにみんなが笑顔になってほしいとの願いを込め、三つのくす玉の一つを笑べえ人形、もう一つを折鶴にした。また行灯の絵は利用者が絵手紙で描き、吹き流しには

り絵と千羽鶴を付ける工夫も施した。

企画委員長のと田尚子さんは「竹飾りを作ること、見学に行くことを利用者は楽しみにしている。家族や見学者に『これ私が作ったんだよ』と説明する人もおり、地域の祭りに市民として参加している喜びがある」と話している。

プロ野球：耳でTV観戦、阪神戦 視覚障害者向け8日中継

毎日新聞 2015年07月07日

◇朝日放送が阪神-中日戦で

視覚障害者向けに、プロ野球のテレビ中継で選手の動きやテロップの内容などを副音声で説明する「解説放送」を8日、朝日放送（ABC、大阪市福島区）が阪神-中日戦で行う。昨秋以降3回目で、ドラマやバラエティー番組での実施例はあるが、プロ野球の生中継での取り組みは全国初。視覚障害者からは「画面で何が伝えられているかが分かり、障害の

ない家族や友人とも一緒に楽しめる」と好評だ。【屋代尚則】

6月3日、阪神甲子園球場で行われた阪神-ロッテ戦。中継画面にはマウンド上の藤浪晋太郎投手が映し出され、左下にこの日の球種の割合が表示された。副音声で中邨（なかむら）雄二アナウンサー（53）が解説する。

「画面には藤浪投手の投球割合が出ています。ストレート57%、カット（ボール）26%、ツーシーム7%、カーブ7%、フォークは3%ということですね。（中略）投球7球目、右バッターの大嶺翔太に第7球を投げました。スライダー、見た、ボール。（中略）藤浪がちょっと苦しい表情。球数は次が75球目」

中邨アナは、外野の守備や打者の様子などもきめ細かく伝えた。

総務省は、東京や大阪などの広域局は2017年度までに放送番組の約1割で解説放送を行う、との目標を定めている。

同局は昨年9月の阪神戦で、生放送では同局初の解説放送を実施。主音声のアナらが話をやめた間に副音声のアナが話す方式だったが、坪沼晴海・テレビ編成部マネジャー（58）は「主音声のアナの話し出すタイミングが分からず大変だった」と振り返る。

このため、今年は副音声に主音声を入れず、副音声のアナが全て実況する形式に変えた。6月の放送では、視覚障害者を支援する社会福祉法人「日本ライトハウス情報文化センター」（同市西区）の職員、林田茂さん（40）が中邨アナのそばに座り助言した。

放送を聴いた視覚障害者の岡田太丞（たいすけ）さん（49）＝兵庫県西宮市＝は「どんな場面かが分かりやすく、視覚障害がない妻と一緒に楽しめた。解説放送は視力が衰えた高齢者なども楽しめるはず」と話す。

林田さんは「他のスポーツ中継のモデルになれば」と話し、広がり期待する。

8日は午後6時16分から放送する。

障害、不便だけ不幸ではない 京都・亀岡で4人組バンド熱演



京都新聞 2015年07月07日
障害者の思いをぶつけた歌を児童に披露する「4 disabilities」（亀岡市吉川町・吉川小）

身体障害者でつくる4人組バンドがこのほど、京都府亀岡市の吉川小（吉川町）と育親中（本梅町）でライブを行った。「車いすは不便だけど、不幸ではない」。前向きに生きる大切さを、歌とトークで子どもたちに伝えた。

亀岡市社会福祉協議会が、障害者との交流を通して、思いやりを学んでもらおうと初めて企画した。

ボーカルの本村智之さん（36）＝亀岡市＝ら脊髄損傷の3人と、聴覚障害の男性による「4 disabilities（ディサビリティーズ）」。4人はオムロン京都太陽（京都市南区）の同僚で、障害者の思いを伝える曲を作ろうと、2011年から活動している。

吉川小では全校児童52人を前に、障害を負った時の気持ちや、トイレなど生活の苦労を語った。リーダーの和田直也さん（37）は「障害者でも、手助けを嫌がる人もいる。みんなが困っていると思わず、どんな助けを求めているか聞いてあげて」と呼びかけた。

ライブでは、聴覚障害で意思疎通に苦労した過去や、悩みを乗り越えてきた経験を歌った5曲を披露。手話を取り入れたサインダンスもあり、熱演に児童らが引き込まれていた。

記憶力低下、カギ握る分子を解明 研究

A F P＝時事 2015年07月07日

【パリA F P＝時事】年齢とともに血液中に蓄積する分子が、認知機能の低下に関連している可能性があるとの研究結果が6日、発表された。研究チームは、記憶力回復治療の実

現に向けた期待を高める成果だとしている。(写真は資料写真)

研究チームによると、「B2M」と呼ばれるタンパク質分子は、老化に伴って血液と脳脊髄液中の濃度が高くなるという。

マウスを用いた実験では、B2Mを抑制することで、学習機能と記憶力の向上がみられた。

論文共同執筆者の米カリフォルニア大学サンフランシスコ校のサウル・ビジェダ氏は、AFPの取材に「今回の成果は、加齢に関連する認知機能障害の回復が期待できる方法が2通り存在することを示している」と語る。

「1つの方法は、若返りを促進する血液因子を導入すること、もう1つは(B2Mのような)老化促進因子を標的とした治療を行うことだ」と同氏は電子メールで述べた。

ビジェダ氏が参加した別の研究でも、若いマウスの血液を注入すると、高齢マウスの学習能力と記憶力が高まることが判明していた。この研究は昨年発表されている。

老化は、認知機能の進行性の低下と、脳内の情報伝達ニューロン(神経細胞)の再生速度低下に関連している。

英医学誌「ネイチャー・メディシン」に発表された今回の最新研究によると、免疫に関与するタンパク質のB2Mは、若い血液が記憶力に及ぼす効果を説明する際にカギとなる可能性があるという。

マウス実験では、B2Mの注入によってマウスの学習能力、記録力、ニューロン成長の低下がみられたと、研究チームは論文に記している。だがこの影響は、注入を止めることで「改善可能」だった。

また別の実験では、遺伝子操作でマウスからB2Mを排除した結果、「B2Mを持たない高齢マウスは記憶障害を発症しないことが観察された」とビジェダ氏は述べている。

これらの実験結果はすべて、タンパク質分子のB2Mが、「高齢者の認知能力の回復が期待できる治療で標的となるかもしれない」ことを示唆していると同氏は続けた。

次の段階としては、B2Mを阻害するか、高齢者の血液から除去することができる分子の開発への取り組みが考えられる。

B2Mについては、認知症患者の脳脊髄液中に通常より高い濃度で存在することがこれまでに分かっている。【翻訳編集AFPBBNews】



いわき初のワイナリー”開所 障害者就労支援へ新特産品 福島民友 2015年7月7日

新たな特産品としての期待もかかる「いわき夢ワイン」

NPO法人みどりの杜福社会(いわき市、今野隆理事長)は6日、同市好間町に、障害者の就労支援などを目的としたワイン製造の「いわきワイナリー」を開所した。同市としては初のワイン製造場で、原料のブドウの収穫から仕込み、瓶詰までのすべての工程を自前でまかなうオリジナルワインの製造を今秋を目標にスタートさせる。

同NPOは、障害者の雇用確保、自立の取り組みとして農業分野に着目し、2009(平成21)年の設

立当初から、オリジナルワインの製造、販売に向けた準備を進めてきた。震災、原発事故の影響で広野町の農園は立ちいかなかったが、同市の好間、大久岡地区の農園で新たにブドウの木々を育て、収穫できるまでに至った。同NPOは、14年6月に収穫したブドウの醸造を山梨県内の事業所に委託し、初のオリジナルワインを完成させたほか、今年3月には果実酒製造免許を取得した。初年度は自社畑のブドウ、同市特産のナシを使ったワ



イン「いわき夢ワイン」約8000本（750ミリリットル瓶）の製造を目標にする。年明けにもいわきワイナリー内の直売所のほか、市内外の小売店で本格的に販売する予定。

同日、いわきワイナリーで行われたオープニングセレモニーでは、今野理事長が「本県の農業や観光の活性化に貢献していきたい」とあいさつ、清水敏男市長、小野栄重いわき商工会議所会頭が祝辞を述べた。出席者の代表がテーブルカットし、待望の開所を祝った。

【知恵の経営】障害者と野菜生産つなぐ

Sankeibiz 2015年7月8日

□法政大学大学院政策創造研究科教授、アタックスグループ顧問・坂本光司

富士山を望む静岡県御殿場市に「ステップ・ワン」がある。障害者就労施設（B型）で、組織形態は社会福祉法人だ。就労している障害者は計52人。内訳は知的障害者44人、視覚障害者を含む身体障害者7人など。重複障害者も7人いる。

根上豊子理事長は働きたくても場所のない障害者に、働く喜びや幸せを提供するため、さまざまな事業を行っている。縫製加工、木工、食品加工、喫茶店運営、草取りサービス、さらには野菜生産などだ。

今回はいま最も注力し、市場の評価も高い野菜生産を紹介する。「ゆめ農」という農業ビジネスだ。根上理事長は農業ビジネスに進出した理由を「もっと給料を上げたかったから。さまざまな事業をやってきたが、農業が障害者に一番合っていると思ったから」という。

同事業は2012年にスタート。広さ1056平方メートルの空調付きビニールハウスでは「リーフレタスクイーン」や「リーフレタスリボン」が水耕栽培されている。ここで働く障害者は15人、障害者の支援スタッフも9人いる。

障害者の主な仕事は、水耕栽培のボックスの中に種をまき、手入れをして、収穫、出荷の手伝いである。

気になる販売先だが、地元の「JA御殿場」と食品スーパー「マックスバリュ東海」が全量買い上げてくれる。使っている水が農園の地下を数十メートル掘った富士山のバナジウム水で、加えて無農薬ということもあり、人気が高い。とりわけマックスバリュ東海からは障害者施設の商品というわけではなく「真においしいものだから、あるだけ持ってきてください」と頼まれ、今や生産が需要に追い付かない状態という。

まだ、スタートして3年だがゆめ農の売上高は、前年度1050万円にまで高まり、今後も拡大が見込まれている。

障害者とは無縁の主婦だった根上理事長が、この仕事を始めたのは、たまたま頼まれたパート職で、特別支援学校に通う生徒の送迎バスの補助者をしたことがきっかけという。「障害者を支援する仕事は自分の天職」と思い、その後、他の施設での勤務を経て、06年同法人を設立している。

こうした頑張る社会福祉法人を見ると、「自分たちには、まだ景気のにじみ出し効果が来ていない」とまるで「問題は外」といった発言をする企業の関係者が散見されるが、ステップ・ワンの「障害者を幸せにしたい」と念じ、経営革新に取り組む姿勢と努力は大いに学ぶべきである。

高知市の佐藤友一さんが知的障害者五輪のボウリングに出場

高知新聞 2015年07月07日

知事に活躍を誓う佐藤友一さん＝中央（高知県庁）

7月25日から9日間、米国ロサンゼルスで開かれる知的障害者のスポーツの祭典「スペシャルオリンピックス（SO）世界大会」を前に、ボウリング競技に出場する佐藤友一さん（22）＝高知市塚ノ原＝が6日、県庁に尾崎正直知事を訪ね、「（目標は）金メダル」と活躍を誓った。県勢の出場は前回のアテネ大会に続き2人目。



スペシャルオリンピックスは、知的障害のある人たちに、年間を通じてスポーツの機会を提供する国際団体。世界大会は4年に1回で、今回は日本勢77人を含め177の国・地域から7千人の選手が集まる。

この日佐藤さんは、コーチでもある母の容子さんらと訪問。尾崎知事から「よかったですね」と声を掛けられ、佐藤さんはにっこり。尾崎知事は練習内容などについて質問し、「体調に気を付けて頑張ってください」とエールを送っていた。

母の容子さんによると、佐藤さんは5月ごろから週3回ほどに練習を増やし、順調に調整。6月中旬からスランプに陥り悩んだものの、最近自己ベストのスコアを出し調子を取り戻したという。世界大会で海外の選手との交流も楽しみにしており、「アメリカを見て来たい」と話していた。

「いつか紅白に」障害抱える歌手がCD さいたまのスタジオが支援

埼玉新聞 2015年7月7日



「自分と同じように苦しむ人の目標になりたい」と話す天羽柚月さん（左）と川田秀夫さん＝さいたま市北区のスタジオ「ゆめひろ」

24時間の介護が必要な身体障害と言語障害を抱えながら歌手として活動する天羽柚月（あまは・ゆずき）さんが6月、CD「感謝状～母へのメッセージ～」を発売した。亡き母と約束した「いつか紅白歌合戦に」という夢を持ち、歌い続けている。

天羽さんは1981年、宮崎県生まれ。2005年に上京し、障害者の自立を支援する事務所のサポートを受け、自立へ向けて活動を開始。介護ボランティアを頼もうと駅前まで道行く人に夜遅くまで声を掛け続けた。

そうした活動の中で「自立して歌を頑張りたい」と思いが芽生え、08年から介護者とともに路上ライブを行うようになった。通行人の心ない声や、不自由な体、思うように出せない声にくじけずに歌い続け、ファンは徐々に増えている。

さいたま市北区宮原町で総合建築企画、損保鑑定会社「ネクスト」社長の川田秀夫さん（70）は、夢に向けて進む天羽さんに共感。同社がJR宮原駅前で運営するスタジオ「ゆめひろ」でのレッスンや、イベント出演契約を結び、音楽活動を応援している。

2枚目となるCD「感謝状～母へのメッセージ～」は、島津亜矢さんの曲を編曲家の若草恵さんが天羽さんのためにアレンジ。01年の大みそか、母親と見た最後の紅白歌合戦で感銘を受けた曲という。

天羽さんは「落ち込み、歌うのを諦めようと思ったことは何度もあったが、声を捨てたら自分ではないとも思った。どんなにつらいことがあっても自分を信じ、諦めないでほしい」と呼び掛けている。

CDはネクストゆめひろ事業部で販売。1枚千円（税込み）。問い合わせは、同事業部（048・651・5454）へ。

短期入所受け入れ先拡充要望／肢体不自由児者ら

四国新聞 2015年7月7日



浜田恵造香川県知事に要望書を手渡す中山会長（右）＝県庁

「県肢体不自由児者と父母の会連合会」（中山節子会長）はこのほど、香川県庁に浜田恵造香川県知事を訪ね、医療行為が必要な障害児者が安心して短期入所できる受け入れ先の拡充などを求める要望書を手渡した。

中山会長らは「短期入所の受け入れ先が圧倒的に不足している」と訴え、医療行為が必要な障害児者を昼夜問わず安心して

預けられる施設を、県内五つの障害福祉圏域に1カ所以上常設することを要望した。併せて、短期入所の受け入れ先となる医療機関を確保するための助成事業を検討することも求めた。知事は「非常に切実な問題だと受け止めている。少しずつ解消できるよう取り組みたい」と述べた。

空き家、18年後に2倍超の2千万戸に 野村総研調べ 産経新聞 2015年7月6日

野村総合研究所は6日までに、住む人のいない住宅の有効活用や撤去といった適切な対策が進まなければ、全国の空き家は18年後の2033年には2千万戸を超えるとの推計をまとめた。現状の2倍以上で、住宅の新築制限も含めた抜本対策を提言している。

算出には、国立社会保障・人口問題研究所の世帯数に関する推計や各種の統計調査を活用した。住宅の新設は今後減少するものの、総住宅数は増加の見通し。人口減少で世帯数が減るのに伴い、空き家も増えていくと予測した。

推計によると、13年に6063万戸だった総住宅数は、23年に6637万戸、33年には7107万戸となる。空き家数は、13年の820万戸（全体の13.5%）が、23年1394万戸（21.0%）、33年2147万戸（30.2%）に急増。「住環境の悪化や行政コストの増大などさまざまな問題が生じる可能性がある」と警鐘を鳴らした。

福祉向け軽量食器強化 大東亜窯業が米粒くっつかない新製品



岐阜新聞 2015年07月07日
粒々（つぶつぶ）加工に加え内側を着色した軽量強化磁器
「内巻の粒々」＝岐阜県土岐市肥田町肥田、大東亜窯業

家庭・厨房用高級食器製造販売の大東亜窯業（岐阜県土岐市肥田町肥田、楓陽光社長）は、福祉関連事業所や病院向け製品を強化する。軽量強化磁器「美濃美人 おかるのキモチ。」シリーズに、新たに高齢者に使いやすい米粒がくっつかず食材が見やすい茶碗（わん）など新製品を加え、販売強化を図っている。

同社は7年前、愛知工業大学との産学連携研究で、重さは一般磁器と同等ながら素材強度が約3倍の軽量強化磁器「トップセラム」を開発。「一おかるのキモチ。」シリーズとして福祉関連向けに販売している。

開発した新たな茶碗はトップセラムを使用した「内巻の粒々」。特殊な下地処理で、釉薬（ゆうやく）を塗ると表面に凹凸が浮かび上がって米粒が付かない同社の特許技術「粒々（つぶつぶ）」加工に加え、碗の内側を赤や青色に塗って食材を見やすくした。粒々加工は現在子ども向け商品を主体としているが、福祉関連向け商品にも拡大した。

シリーズには、ふちを内巻きにしてスプーンでも食材がすくいやすくなった小鉢や、取手の大きいマグカップなどもある。

柴田政勝副社長は「いい器を使って生活の質にこだわる施設も増えている」と強調。日本政策金融公庫の新事業育成資金を活用し、全国の福祉施設や病院、サービス付高齢者向け住宅などへの提案を強化する。「内巻の粒々」は初年度300個の販売を目指す。

「内巻の粒々」は1個1500円。JR土岐市駅前の「土岐ルネッサンスまちの駅」でも取り扱っている。

「子育て支援手厚い職場」に上田の社福法人認定 読売新聞 2015年07月07日

子育て支援に熱心に取り組む企業を認定する「プラチナくるみん」に、上田市の社会福

社法人「依田窪福祉会」（渡辺和美理事長）が県内で初めて選ばれた。今年4月に施行された改正次世代育成支援対策推進法に基づく認定制度で、全国でも認定は13例目となる。

プラチナくるみんは、厚生労働省が「子育てサポート企業」として認定している従来の「くるみん」の認定企業が対象。この中から、男性従業員の育休取得率が13%以上や、女性従業員が仕事と育児を両立し、活躍できるような計画を策定・実施するなどの要件を満たした企業を認定している。

依田窪福祉会は、運営する老人ホームなどで月に3回の「ノー残業デー」に加え、有給休暇と育児休業の取得促進を3本柱に据え、直近の2年間で、育児休業や看護休暇の取得率が男女とも100%だった。

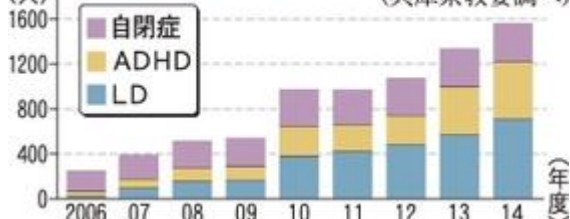
プラチナくるみんの認定を受けると、新築や増改築する建物について税制上の優遇措置を受けられる。

6月26日に長野労働局であった認定書の交付式で、渡辺理事長は「県内第1号は荣誉。より子育て支援をステップアップさせていきたい」と述べた。県内では同日現在、57社がくるみんの認定を受けている。

発達障害児8年で6倍 認知拡大、教員確保が課題

神戸新聞 2015年7月8日

発達障害が要因で通級指導を受ける児童生徒数
(兵庫県教委調べ)



発達障害の可能性のある兵庫県内の公立小中学生のうち、通常学級に在籍しながら、必要に応じて特別な指導を受けている児童・生徒が2014年度、1565人に上り、8年間で約6倍に急増したことが兵庫県教育委員会への取材で分かった。「読み・書き」が苦手だったり、授業に集中できにくかったりする障害への認知が進んだことが背景にある。今後も増えるとみられ、教員の確保が課題になりそうだ。

兵庫県教委が年に1度まとめる「通級指導を受ける児童生徒数」のうち、学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）、自閉症が要因とされる数を調べた。

通級指導は、地元にある学校の通常学級で学びながら、教科の一部などを別室や他校で個別に教わる形態。保護者や学校が市町に申し出て第三者機関の判定を経た上で受けられる。

兵庫県内には、知的障害を伴わない発達障害の子ども向けに132小中学校に139教室が設けられ、06年度は253人（LD23人、ADHD41人、自閉症189人）だったが、14年度には1565人（LD710人、ADHD509人、自閉症346人）に増加。全国でも同様の傾向で、14年度は過去最多の3万7559人だった。

発達障害者支援法の施行から今年4月で10年となり、発達障害の特徴が知られるようになったことも要因とみられ、県教委も「保護者や教員の理解が進んだ」と分析する。

一方、少子化に伴い、財務省は24年度までに義務教育の教職員を約4万2千人削減できると試算。兵庫県教委などは「通級指導へのニーズは高まっている。子どもの特性に合わせ、教員を増やして授業を行う必要もある」として、国に教員配置の充実を求めている。

（上田勇紀）

【発達障害】文部科学省の定義では学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）、自閉症などを指す。LDは知的発達に遅れはないが、読む、書くなどの特定能力に困難を示す。ADHDは年齢に不釣り合いな注意力や衝動性、多動性が特徴。自閉症は対人関係の難しさや、特定のものに対するこだわりが見られる。いずれも個人差があり、複数の症状を併せ持つ場合もある。文科省の推計では発達障害の可能性のあるのは小中学生の約6.5%。兵庫県内の公立小中学生に当てはめると、約2万8千人に上る。

障害者スポーツ 選手強化、県が本格化 19年 全国大会開催に向け

茨城新聞 2015年7月7日

「卓球バレー」を楽しむ参加者たち=小美玉市玉里運動公園体育館

2019年に国民体育大会とともに本県で開催される第19回全国障害者スポーツ大会に向け、県は本格的に選手の強化や競技種目の普及に乗り出した。県は「大会成功には本県選手団の活躍が欠かせない」（障害福祉課）とするが、正式13競技の中には、県内に選手が少ない競技もあるという。そのため、県は体験教室を県内各地で開くなどして選手層の拡大に取り組む方針。



全国障害者スポーツ大会は毎年、国体の開催後に同じ開催地で開かれている。本県選手団は例年、60人を超える役員と選手が参加。2012年の岐阜大会は都道府県と政令指定都市を合わせた67参加団体中14位と健闘したが、13年、14年は34位、38位とともに低迷している。

同課は、低迷の主な理由について「選手数そのものが少ないこと」とする。県障害者スポーツ選手育成・強化基本計画によると、本大会予選となる県大会への参加者は、アーチェリー（聴覚、内部障害）と卓球（視覚）、バレーボール（聴覚男女）などがゼロだった。水泳（視覚、聴覚）やフライングディスク（視覚、聴覚）も参加者が少なく、車いすバスケットボールは1チームにとどまる。

同課によると、特別支援学校に在学中はスポーツへ参加する障害（児）者が比較的多いものの、卒業後は会場への送り迎えなどを理由に、スポーツに取り組む機会が減るという。

しかし、スポーツへの参加は本人の健康増進だけでなく、社会参加や、障害者に対する理解の促進にもつながることから、同課は「本県開催をきっかけに障害者スポーツをより一層普及させたい」とする。

県は本年度、気軽に楽しめる「風船バレー」や「スポーツ吹き矢」などの体験教室を既に開催。今後も選手の強化や育成を狙いにした水泳やフライングディスクなどの教室と合わせて、県内各地で定期的に教室を開催していく。

小美玉市で開かれた教室に参加した女性（71）は「普段はなかなかスポーツを楽しむ機会がない。今回はいい汗を流せた」と笑顔。特別支援学校に娘（16）を通わせる母親（40）は「娘は楽しそうで、参加させてよかった」と話した。

県教委は、障害者スポーツの理解と啓発を図るため、県立盲学校と県立中央高、ひたちなか市立阿字ヶ浦中、茨城大付属中の生徒たちがスポーツを通じて交流する体験教室を開く予定。障害者アスリートによる講演会も予定されている。

同課は「大会の成功はもとより、大会後も障害者スポーツが各地域に根付くように取り組みたい」と意気込んでいる。（小池忠臣）

★全国障害者スポーツ大会 2001年から「全国身体障害者スポーツ大会」と「全国知的障害者スポーツ大会」が統合され、国民体育大会開催地と同じ都道府県で開催される。第1回大会は宮城県で開催。正式競技は陸上や水泳など個人6競技と、サッカーやソフトボールなど団体7競技。例年、選手約3500人、役員約2千人が参加する。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

